

1

a

一望

b

厳密

c

有効

2

ノンリニアの道具箱

3

A

す

B

一

C

お

D

さ

4

ウ

5

試

行

6

(記述題)

7

イ

8

イ

9

ウ・エ

10

漫

然

と

(順不同・完答)

2

1

従順(柔順)

b

形相

c

賛美

2

手の届かない人

3

イ

4

I

ア

II

ア

III

エ

IV

ア

5

(記述題)

6

A

単

・

刀

B

全

・

全

C

意

・

長

7

イ

8

(記述題)

9

I

弾

き

く

II

共

に

仲

間

10

ウ

11

ウ

(完答)

(完答)

(完答)

(完答)

1

その本にどういう情報が書いてあるのかという最低限の情報を把握しておけば、後々「あの本に必要な情報が書いてあったな」と思いつき、他に活かすことができるということ。

(同意可)

2

バ	イ	オ	リ	ン	を	十	年	も	弾	い	て	い	る	の
に	、	多	様	な	音	が	出	せ	な	い	こ	と	に	対
し	て	腹	立	た	し	く	悔	し	い	気	持	ち	。	

(同意可)

8

せつかく持っている能力や才能も、世の中に出なければ認められる機会も得られないということ。

(同意可)

【配点】

1 1 3 2 1 6
6 5 8

その他

各2点×13＝26点
各6点×3＝18点
各4点×14＝56点

1 ① a 「一望」は一目で見渡すこと。b 「厳密」は細部にわたってきびしく注意を行き届かせるさま。「厳」の「夂」部分を「又」にしないよう気をつけよう。c 「有効」は効果・効力が有ること。

2 ① を含む一文は、冒頭の「本をリニアなものとして捉えるか、ノンリニアなものとして捉えるか」という問いかけに対する答えであることをまずはおさえよう。次の段落に「本はそもそも：リニアに読み通す必要はありません」とあるので、①には「ノンリニア」がはいることがわかる。また、①に「」がついていることや、そのあとが「：としての書物」と続いていることから、本の比喩表現がなくてはまると考えることもできる。

3 A 「腰をすえる」は落ち着いて事をする。B 「一概に」はひつくるめて、一様に。下に否定的な表現を伴うことが多い。C 「おしむ」は出すのをもつたに思ふこと、出し渋ること。D 「さること」はもちろんのこと、言うまでもないこと。

4 ② を含む段落の「理解はしびしび（「たびたび」）遅れてやってくる」「分かるから〇、分からないから×という単純なものではありません」という二文から、文章には「分かる」ところと「分からない」ところがあり、「分からない」ところは「理解が遅れてやってくる（＝読んだタイミングからは遅れるけれど理解できる）」という内容を読み取りたい。

5 ③ を含む一文から、この問いでは「『この本にはこんな道具（＝内容）が入っていますよ』ということをわかりやすくするために筆者が何をしているか」を聞かれていることをおさえよう。「ではどうやって（内容を）『つかむ』のがよいでしょうか」という問いかけの答えに注目しよう。

6 ④ を含む段落とその一つ前の段落から、「0」が「本の正体が分からない状態」をあらわしていることを読み取ろう。そのうえで、「1」が「本の正体が把握できている状態」、「2や3」はそこからさらに一歩進んだ、後々思い出せる状態（活用できる状態）と言いかえて説明する必要がある。

7 ⑤ を含む一文が「ということは：」で始まっているので、読書の前の段階で行う本の「仕分け」がポイントだとわかる。「仕分け」について書かれているのはイのみである。

8 「文章全体をふまえて」という指示を読み落としてはならない。紙の本の「ノンリニアな読み方（拾い読み・パラパラ読み）ができる」「本の扉にメタデータを書き込める」といった利点が述べられていた。

9 「すべて」選ぶことに注意しよう。「最も適当なもの」を選ぶときよりもさらに本文との照合の正確さが要求される。アは「学究的な読み方も、僕はまったく否定しません」とあり、ナンセンスなのは「読書を重々しく崇高な労働のように捉える」ことだと述べているので不適である。イは「読み手か書き手かによって異なる」とあるが、読み方は立場によって異なるのではなく、本文の最後の方に書かれていたように本の種類によって異なるもので不適である。

10 脱文補充では、「戻す文（◎の文）から戻す箇所の見当をつけることが欠かせない。「ただ」という接続語、「その必要最低限の『二つか三つ』のお土産（＝読書で得たもの）」という指示語が含まれた表現から考えよう。

1 ② a 「従順」は素直で人にさからわないこと。b 「形相」は顔つきのことだが、特に激しい感情があらわれているときに用いる。c 「賛美」はほめたたえること。

2 通読時に漠然とでいいので、――線①についてどういうニュアンスをあらわしているかを考えておきたい。ここでイメージできなければ、文章後半でメグがコンテストに出ることの意義を先生に問うているところと結びつけやすい。

3 ② を含む段落にはメグの考えていることが書かれており、内容としてはこの②の四行後から始まる段落に、さらに「――十年もやってきて：」から始まる段落につながっていくので、これらのつながりも意識して考える必要がある。「優勝」「ハッピー」というキーワードの他に、「わたしは、わたしに負けた」という表現から、メグはコンテストは自分との戦いだと思っていることが読み取れることも含めて考えよう。

4 Iはこの場面で楽器を弾いている人、IIはこれから「フルサイズ」を与えられようとしている人、IVはこの場面でセルゲイ先生と会話している人である。IIIは二つめの【中略】のあとからここまでが崇の説明であることから考えられる。

5 心情を問われているので、「できごと（事情）＋心情」の形で答えよう。「どうしてできないの」から、「何か」ができない自分に対して「腹を立てる」「情けなく思う」「責める」といった心情になっていることが読み取れる。「何か」の部分は直前で長々と説明されているので、ここを短く、かつ、わかりやすくまとめ直そう。

6 A 「単刀直入」は前置きなしにすぐに本題にはいること。B 「全身全霊」は身も心も全部。C 「意味深長」は奥深くて深みのあること。

7 崇がセルゲイ先生から「フルサイズ」の購入を勧められているこの場面において、生活がそれほど楽ではないという説明があること、先生が遠慮がちに「フルサイズ」の話を持ち出していること、先生が「ご予算はどれくらい？」「私もいまだにこの楽器の値段というのは、謎ですな」と話していることから、身の丈にそれほど合わない高価な楽器を買おうとしている崇へのセルゲイ先生の配慮が読み取れる。

8 ⑤の比喩表現をほどけばよい。直前に「幸運という雷」とあるので、「雷は落ちる」＝「幸運がやってくる」となる。「家の外を出歩いている者に」は直前の「そのような引込み思案」の反対になるはずなので、「能力や才能を売り込む」などと言いかえらる。

9 ⑥の「そのように」は、直前の「どこまでもエゴイスティックで、そのくせソーシャルで、しかもポジティブな連中」を指しており、このセルゲイ先生の発言はメグの「弾きたいから弾く！」という発言を肯定したものであることから考えよう。「弾きたいから弾く」というのは自分の欲望に任せた自分本位の考え方であり、それと矛盾しているIIには「他人」にあたる内容がはいるだろうと推測できる。この問いでは「演奏者の矛盾」について問われていることにも気をつけたい。

10 ⑦を含む一文から「相手のなかに答えを見つけ合う二人」を「不思議な人たちだ」と思っていることがわかる。また、直後の「遠いようで近い、近いようで遠い、それなのにおたがい中心がちやんとあって、おたがいの中心に引かれ合いながらも、日蝕や月蝕のごとく、重なり合った瞬間にはもう離れ始める」のところも「不思議」の説明になっているので、このこと選肢肢とをきちんと照らし合わせて考えよう。

11 ⑧の「その光」は、「娘という、父親にとっては輝かしい光の軌跡」つまり「自分の娘」を指していることをふまえて考えよう。――線⑧の一つ前の段落から妻を亡くしていることも読み取れるので、「悲しむ心」は妻に対してのものだと考えられるだろう。